

聞き書きで地域をつくる： 聞く人がいて、話す人がいる

佐野直子ほか執筆・編集
名古屋市立大学大学院
人間文化研究科 佐野直子研究室 2018年



名古屋市立大学大学院人間文化研究科
曾我 幸代・谷口由希子

本書は、「聞き書き」をはじめた
人のための実践的な入門書である。
一・テーマを定めるー聞き書きの
多様な目的、二・だれが書くのか
ーよそ者・若者？、三・コーデ
ィ
ネーターー聞く人、話す人をつなぐ、
四・だれに何を聞くのかー地域の
資源を見つめなおす、という構成に
はじまり、実際に聞き書きを行う心
得、インタビュー方法、成果の発信

方法や聞き書きの活用方法が紹介さ
れている。本書の後半部分には、コ
ラム形式による日本国内や海外で行
われている「聞き書き」のケース紹
介がある。とりわけ、二〇〇二年に
林野庁と文部科学省の主催で開催さ
れた「森の、聞き書き甲子園」の
実践は興味深い。全国から応募して
きた高校生一〇〇人が「聞き書き甲
子園」として、日本中の森・川・海
の名人のところに赴き、名人の技や
知恵をはじめ、生き方について聞き
書きを行うものである。現在も続く
この実践は、NPO法人が運営事
務局を引き受け続けられている。
「聞き書き」、すなわち聞いて書く
ことは、学校の授業や研修、講座な
どもでもする行為である。学校とい
う場で私たちが習得する技能といっ
てもよいだろう。だが、本冊子の副題
にもなっている「聞く人がいて、話
す人がいる」という前提が、実は先
述した場では見落とされていること
が少なくない。学校教育や社会教育
という場において、「誰が話すのか」
が注目され、その人にひきつけられ
人が集まるといふ構造は当然のよう
につくられている。

し手に話す内容を選ばせる。こうし
たプロセスで話し手は記憶を再文脈
化する。時に、それは新たに引き出
され、記憶が再生されることもある
う。聞き書きというプロセスには、
本冊子に書かれている「人のつな
り」とともに、「記録」になっ
る出来事および既存の記憶の捉え直
しや文化の再生を促す可能性がある
のかもしれない。
次に、本書のタイトルに掲げられ
ている「聞き書きで地域をつくる」
ことを考えてみたい。聞き書きは「話
す人」誰もが人生の主体であり、社
会の中に生きる個人という存在であ
ることを「聞く人」が明らかにする
共同作業である。さらに、「聞き書
き」を分析するによって「話す人」
が生きた時代や社会の諸相が明らか
になる。つまり、「聞き書き」を行
うことによって、これまで記録とし
て残されてこなかった個人の記録、
産業や地域文化、伝承といったオー
ラルヒストリーや自明視されてきた
事象が文字資料となり、それらは社
会的な史料となる。さらに、こう
した一人ひとりのライフストーリー
を集積し紡ぐことによって、地域の
生活史として形成され、また社会史
として分析することができる。

聞き書きの特徴としてもう一つあ
げられるのは聞き手の主体性であ
らう。聞き手が字義通りの受け手であ
れば、上のような可能性を引き出す
ことは難しい。聞き手が対象者から
何を聞き取りたいのかが重要となる。
本冊子にも書かれているように、聞
き手による受け取り方の違いが、対
象となる場や人の特徴を多様に描く
ことになるのは確かである。「他人
事ごと」が「自分ごと」になる、も
しくはするためにも聞き手自身が対
象に開かれた構えでいることが前提
になるように思える。たとえば、こ
なす（なければならぬ）仕事とし
て閉じた構えで向かえば、構造化イ
ンタビュー（一問一答形式のような
質疑応答）に終始することさえある。
他者や対象に対して、聞き手となる
私たち一人ひとりの心構えが問われ
てくるだろう。本冊子は、そうした
構えを最低限整えるための準備過程
がわかりやすく、柔らかに記された
書である。